

の上にれんがを積み、二階、三階までもコンクリを持ち上げる。このような作業なのでノルマはなかった。しばらくして民主委員長を選出して、作業より帰所後、社会主義の要旨について教授を行った。

七月に入り、二十人がアムール河の中州に、家畜の飼料にする草刈りに。私も救護員として同行。三カ所の水たまりがあり、その中に大きな鯉や鮒がいたので、大釜で煮て食べた。十日間で終わり帰所。民主運動を盛り上げたためか、七月末、五百人のうち四百五十人が帰国した。五十人は残された。私もその一人。馬車の係が帰国したので、私とその役を引き受けた。毎日、糧秣受領と収容所長職員の家庭に水、石炭、薪等の運搬が仕事。家族の人が、私が伺おうとお茶を出し、パンを与えてくれる。

二十四年八月十五日、帰国のため収容所を出発。八月三十日、山澄丸にてナホトカを出発。九月一日、舞鶴に上陸。九月三日、七年ぶりに帰宅。

飢えと寒さと重労働

千葉県 溝口 菊雄

ウラルの山中で

八月十五日終戦の玉音放送に悲憤の涙を流し、十九日にソ連軍使の出迎えて用心深さと猜疑心の強さにてこずったあげく、特務機関本館に集合を命ぜられ、武装解除を受け、続いてハルビン刑務所に収容された。ここでは空腹と毎晩のように襲う南京虫の大軍に悩まされ、終戦直後のことでもあり、生命に対する不安さえ頭の片隅には残っていた。

一週間ほどして貨車に乗せられ、東へ向かった。ソ満国境の激戦の跡を通り、着いた所は極東司令部があるウオロシロフであった。ここではもっぱら取り調べを受けるのが仕事だった。

十二月の初め、再び貨車に乗せられ、汽車は西へ西へと走った。二十八日目に十数人の死者を出しながら一面

雪に覆われたタブダに着いた。ここでは今まで履いたこともない木靴を履かされ、貯木場の氷だらけの太い丸太の整理というなれない危険な仕事をさせられた。梅里中佐は丸太の下敷きになって、両大腿部を骨折し、長い間苦しんだ。終戦直前までハルピンの陸軍病院と一緒に入院していた木材、河内山両大尉が具合が悪いのに作業に出されて亡くなった。私も胸が痛み、診断を受けにいき、胸が痛むのを見て欲しいと訴えた。医師は私を診断し、私の胸にヨーチンを塗り、「大丈夫だ。作業に行け」と言った。若干ロシア語を話せる私は腹が立った。「あなたは医者か。医者だとすればとてつもないヤブ医者だ。本人が具合が悪いと言っているのだ。それがわからないのか」とロシア語で怒鳴りつけた。すると「貴様、囚人のくせに生意気なことを言うな。きつといいことはないからそう思え」と怒鳴り返してきた。

数日して伐採班の交代要員が派遣されることになった。交代要員は、私を除いてすべてロシア人だった。そのとき、数日前のソ連軍医としやり取りを思い出した。初めて乗る囚人護送車に荷物のように積み込まれ、ウラ

ル山中の収容所に送られた。仕事は伐採だった。私以外の班員が切り倒すシベリア松の切り落とした枝を集めて焼き捨てる仕事をさせられた。倒したばかりの生木の枝といっても太く長く、しかも雪は深く集めるだけでさえやっとならなかつた。一日の仕事が終わるとくたくたに疲れた。間もなく私は日本人作業班に編入された。作業は薪切りだった。二人びきの鋸で直径三、四十センチの丸太を一メートルの長さに切るのだが、日本人は全員疲れきっていた。一回鋸を押してはこっくりこっくり、一回引いてはこっくりこっくり眠るという状態であつた。零下何十度という寒空、しかも深い雪の上で、さらにはなれない仕事で目の周りはいくま取りしたように黒く、支給される最低の食糧でノルマの達成どころの騒ぎではなく疲労困憊その極に達し、まさに死の一步手前という極限まできていた。こんな状態に驚いた当局は、日本人を急遽暖かい所へ移すことにしたらしい。

ハバロフスクで

ソ連領内を東から西へ、南から北へと転々と移動させられ、ウラルからウスチカメノゴルスク、ジェズカズガ

ン、ラキチャンカ、メッドヌイ、マグネットゴルスク、
ゴリキー、ホールと日本人旅行者も行ったこともない所
を巡り巡って、ハバロフスクの第十六収容所にたどり着
いた。ここにはたくさん日本人がいた。上官も同僚も
部下も知人もいた。ここでは裁判が待っていた。私は、
スパイ嫌疑で、二十二年の強制労働の刑を言い渡され
た。判決後、私は収容所隣接の病院で病理技手兼通訳と
して働いた。回診に付いていき、医師の指示を受けて処
置した。経験三十年を誇るグレービッチ少佐は、デキタ
リスと配合禁忌のストロハンチンを併用しようとしたこ
ともあり、私は、その処法を中止するのに苦勞した。ま
た時には蛭を高血圧患者に一匹ずつ付けてすぐ治ると信
じていた。一匹の蛭が二百グラムの血を吸うと言ってい
た。精々二、三グラムと反論した私は、数日後作業に出
された。

間もなく日本人の積年の不満が爆発し、大事件が勃発
した。

去勢された馬のように

栃木県 山田 市郎

ソ連国境通過と、密林の中の収容所暮らし、牡丹江の
冬は早い。もう十一月下旬に入っていた。来る日も来る
日も、いつ帰れるか見当のつかない毎日を送っていた。
目的のない毎日の連続は、ただうんざりするだけだっ
た。そのうち帰国のため準備せよ、というソ連側の通告
を受け、一時ににぎやかさを取り戻し、暗闇に光を見る
思いがした。牡丹江駅に向かって、五百人単位で出発し
ていった。帰還列車は有蓋貨車を二段にしたもので、一
車両五十人すし詰めの窮屈のギリギリのものであった。
機関士はウクライナ系ソ連人であった。ムシロに毛布を
敷いて防寒服装のままのゴロ寝である。

国境通過は鉄道警備のソ連兵が遮断機を開閉するだけ
の全くお粗末なもので、人家も見えず、索漠たるもので
あった。あたかも我々の前途を暗示するかのよう。